

甲州道中と内藤新宿

甲州道中（甲州街道）は、徳川家康が慶長・元和年間に整備を行った五街道（ほかに東海道・中山道・奥州道中・日光道中）のひとつで、江戸から甲府を経て下諏訪で中山道に合流します。

この街道の最初の宿場は高井戸（現杉並区）でしたが、日本橋を出発して四里八丁（16.6km）もあったため、人馬ともに不便でした。

そこで浅草阿部川町（現元浅草四丁目）に住む名主喜兵衛（のちの高松喜六）は、元禄10年（1697）に同志4名とともに、太宗寺の南東に宿場を開設するよう、幕府に願いを出しました。

なぜ喜兵衛らが宿場開設を願い出たのか、その理由はわかっていませんが、5人は開設に際し運上金5600両を納めることを申し出ました。

この願いは翌元禄11年（1698）6月に許可となり、幕府は宿場開設の用地として、譜代大名内藤家の下屋敷（現新宿御苑）の一部や旗本朝倉氏の屋敷地などを返上させて、これにあてました。

こうして「内藤新宿」は、元禄12年（1699）2月に開設のはこびとなり、同年4月には業務を開始しました。喜兵衛らも移り住み、名主などをつとめ町政を担当しました。

宿場は東西九町十間余（約999m）、現在の四谷4丁目交差点（四谷大木戸）の約200m西から伊勢丹（追分と呼ばれ甲州道中と青梅街道の分岐点であった）あたりまで続いていました。

宿場は大きく3つにわかれ、大木戸側から下町・仲町・上町と呼ばれました。太宗寺の門前は仲町にあたり、本陣（大名・公家・幕府役人などが宿泊・休息する施設）や問屋場（次の宿場まで荷を運ぶ馬と人足を取り扱う施設）などがありました。

「内藤新宿」は、江戸の出入口にあたる四宿（品川・板橋・千住・新宿）のひとつとして繁栄しましたが、その繁栄を支えたのが旅籠屋でした。ここには飯盛女と呼ばれる遊女が置かれましたが、元禄15年（1702）には当時幕府公認の遊興地であった吉原から訴訟が出されるほど繁昌しました。

このように大変な賑わいをみせた「内藤新宿」でしたが、享保3年（1718）には開設後わずか20年にして、宿場は廃止となります。

これは、利用客の少なさ、旅籠屋の飯盛女がみだりに客を引き入れたことなどが原因といわれますが、八代將軍徳川吉宗の「享保の改革」に伴う風俗統制の影響もあったようです。

その後、度重なる再興の願いにより、明和9年（1772）に宿場は再興されました。

太宗寺の創建と内藤家

太宗寺は、このあたりに太宗という名の僧侶が建てた草庵「太宗庵」がその前身で、慶長元年（1596）頃にさかのぼると伝えられています。

太宗は、次第に近在の住民の信仰をあつめ、現在の新宿御苑一帯を下屋敷として拝領していた内藤家の信望も得、寛永6年（1629）内藤家第五代正勝逝去の際には、葬儀一切をとりしきり、墓所もこの地に置くことになりました。

これが縁で、寛文8年（1668）六代重頼から寺領7396坪の寄進をうけ起立したのが、現在の太宗寺です。

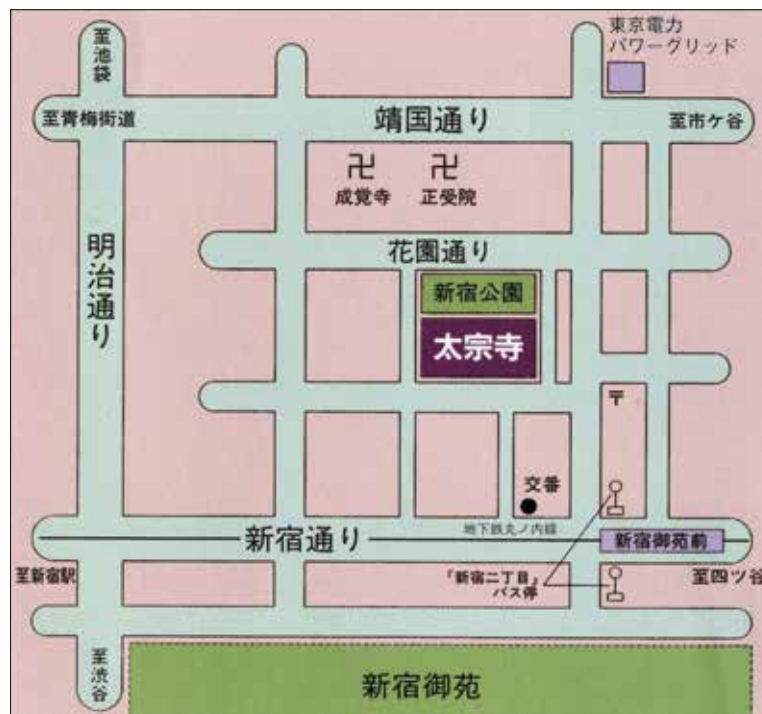
内藤家は七代清枚以後は歴代当主や一族が太宗寺に葬られるようになり、現在も墓所が営まれています。

また「内藤新宿のお閻魔さん」「しょうづかのばあさん」として親しまれた閻魔大王と奪衣婆の像は、江戸庶民の信仰をあつめ、藪入りには縁日が出て賑わいました。

現在も、毎年お盆の7月15・16日には、盆踊りとともに閻魔像・奪衣婆像の御開扉、曼荼羅・十王図・涅槃図の公開が行われています。

なお、寺号「太宗寺」は、創建時の庵主太宗の名をいただき、山号「霞関山」は、当時四谷大木戸一帯が霞ヶ関と呼ばれていたことに因み、院号「本覚院」は内藤正勝の法名「本覚院」を拝しています。浄土宗の寺院です。

スタンプ



交通のご案内

地下鉄丸ノ内線「新宿御苑前」より徒歩3分

都営バス品97系統「新宿二丁目」より徒歩3分

「新宿区は、環境への負荷を少なくし、未来の環境を創造するまちづくりを推進しています。

本誌は森林資源の保護とリサイクルの促進のため、古紙を利用した再生紙を使用しています。」

R70
古紙パルプ製紙率100%再生紙を使用



住所 新宿区新宿二一九-12
電話 〇三（三三五六）七七三二
代表（住職） 間川良元

太宗寺の文化財



「江戸六地藏」品川寺（品川区）・東禅寺（台東区）・真性寺（豊島区）・霊巖寺（江東区）・永代寺（江東区・地藏は現存しない）・太宗寺

新宿区指定有形民俗文化財 えんまぞう 閻魔像

木造で、総高は550cm。文化11年（1814）に安置されたもので、製作もその頃と推定されます（関東大震災で大破し、体は昭和8年に造り直したもの）。江戸時代より「内藤新宿のお閻魔さん」として庶民の信仰をあつめた像で、かつては藪入り（1月と7月の16日に商家の奉公人が休暇をもらえる日）に縁日が出て賑わいました。また、弘化4年（1847）3月5日には泥酔者が閻魔像の目を取る事件が起り、錦絵になるなど江戸中の評判になりました。



新宿区指定有形民俗文化財
だつえぼぞう
奪衣婆像
木造で、総高は240cm。明治3年（1870）の製作と伝えられます（昭和8年に改作の可能性あり）。奪衣婆は、閻魔大王に仕え、三途の川を渡る亡者から衣服を剥ぎ取り罪の軽重を計るとされ、この像でも右手には亡者からはぎ取った衣が握られています。また、衣をはぐところから、内藤新宿の妓楼の商売神として信仰されました。

新宿区登録有形文化財（歴史資料） きりしたんどうろう 切支丹灯籠

昭和27年（1952）に内藤家墓所から出土した織部型灯籠の竿部分（脚部）で、現在は上部の笠・火袋部分も復元し補われています。石質は白みかげ石で、江戸時代中期の製作と推定されています。切支丹灯籠は江戸時代、幕府のキリスト教弾圧策に対して、隠れキリシタンがひそかに礼拝したとされ、織部型灯籠（安土桃山〜江戸初期の大名・茶人古田織部が好んだ灯籠）の全体の形状は十字架を、竿部の彫刻はマリア像を象徴し、マリア観音とも呼ばれます。



墓塔は3基とも宝篋印塔で、中央が五代正勝、右側が十三代頼直、左側が内藤家累代の墓塔となっており、正勝の墓が区指定史跡に指定されています。



新宿区指定史跡 ◆内藤正勝の墓 (内藤家墓所)

江戸時代に信州高遠の藩主をつとめた譜代大名内藤家の墓所で、かつては約300坪・57基の墓塔がありましたが、昭和27年（1952）都の区画整理事業に伴い、現在地に改葬されました。

新宿区指定有形文化財（考古資料） ◆内藤家墓地出土品

昭和27年（1952）に内藤家墓所が改葬された際に出土した副葬品約400点で、内容は鏡・煙管・かんざし・懐中時計や、土製品・陶器のミニチュア、貨幣などとなっています。

新宿区指定有形文化財（彫刻） みかづきふどうぞう ◆三日月不動像

額の上に銀製の三日月をもつため、通称三日月不動と呼ばれる不動明王の立像です。銅造で、像高は194cm。江戸時代の作ですが、製作年・作者などは不明です。寺伝によれば、高尾山薬王院に奉納するため甲州街道を運搬中、休息のために立寄った太宗寺境内で盤石のごとく動かなくなったため、不動堂を建立し安置したと伝えられています。

ほていそんぞう ◆新宿山の手七福神・布袋尊像

新宿山の手七福神は、昭和初期に創設されたもので、太宗寺（布袋尊）・鬼王神社（恵比寿神）・永福寺（福祿寿）・巖島神社（弁財天）・法善寺（寿老人）・経王寺（大黒天）・善国寺（毘沙門天）の7ヶ所となっています。

◆塩かけ地藏

願かけの返礼に塩をかける珍しい風習のある地藏尊です。造立年代や由来については、はっきりしません。



むりょうじゅきょうまんだら
◆無量寿経曼荼羅

紙に描かれており、縦203cm、横195cmの掛軸となっています。制作年代・作者については不明ですが、「大曼荼羅」より新しいものと推定されます。



じゅうおうず ◆十王図

地獄思想に基づき、冥土に君臨し死者の罪状を審判する十人の王を描いたもので、一人一幅の掛軸となっています。紙に描かれ、それぞれ縦116cm、横53cm。制作年代・作者については不明ですが、江戸時代末頃のものとして推定されます。

※曼荼羅・涅槃図・十王図などは、毎年7月15・16日に公開します。

閻魔大王（五十七日忌）

新宿区指定有形文化財（絵画） かんむりょうじゅきょうまんだら ◆観無量寿経曼荼羅 (大曼荼羅)

太宗寺に伝来する三幅の曼荼羅（浄土宗の三大經典による）のひとつです。奈良県当麻寺の観無量寿経曼荼羅を同寸大に模写したもので、紙に描かれており、縦425cm、横408cmの掛軸です。制作年代・作者については不明ですが、江戸時代初期のものとして推定されます。



あみだきょうまんだら
◆阿弥陀経曼荼羅